

問1 次の話のおもしろさは、「ある僧」の言動のどんな点にあるか。

二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

ある山寺に上人ありけり。万の法師集まり来たる中に、ある僧、申しけるは、

「法師の吾は生まれてよりこの方、すべて腹立ち候はず」といふ。この上人、

※
学生なるがゆゑに、仏法の道理を以てこれを信ぜず。

※
「凡夫、貪・瞋・痴の三毒あり。聖者にてましまさば、申すには及ばず。凡夫と

して、すべて腹立たぬ人はなき事なり。いかでか三毒なからむ」と言へば、「すべ

て、いささかも腹立たず」といふを、なほ信ぜずして、「まこととおぼえず、御

坊のそらごととおぼゆる」と言はれて、「立たぬと言はば、立たぬにてこそあらめ。

かくのたまふべきか」とて、顔をあかめてしかりけり。

(柳沢淇園『雲萍雑誌』より)

※上人：すぐれた僧

※学生：すぐれた学者

※凡夫：煩惱にとらわれて仏の教えを悟れない人

※貪・瞋・痴：欲・怒り・迷い

※御坊：あなた

【解答】

腹を立てたことがないと言っておきながら、腹を立ててしまった点。（三十一字）

【大意】

ある山寺に上人がいた。多くの法師が集まっている中で、ある僧が、「法師の私は生まれてからこれまで全く腹を立てたことがない。」という。この上人はすぐれた学者だったので、仏法の道理によってこれを信じなかった。

（上人が、）「人には、欲・怒り・迷いの三毒がある。聖者でいらつしやいますならば申すには及ばない。人は全く腹を立てない人はいないのだ。どうして三毒がないだろうか、ないはずがない」と言うと、（ある僧は、）「全く少しも腹が立たない」というのを、（上人は）やはり信じずに、「本当とは思えません。あなたのうそだと思えます」と言われて、（ある僧は）「立たないといえ、立たないのだ。なぜこのようにおっしゃるのか」と顔を赤らめてしかつた。

問2 次の傍線部は、「よく物を心にとめてわすれぬもの」が最初に語った内容からすると意外な返事であったと考えられる。どんな点が意外なのか。三十字以上、四十字以内で書きなさい。

よく物を心にとめてわすれぬものが、「むかしいづこの山にのぼりしが、かかる峰に松のいくもとありて、そのうちにかく柳たれたるに、いま一木は高くそびえてたてり。そのかたはらに、まきの大きやかなるが、横ざまに生ひいでて、青つづらのかかりしさま。」などとかたるに、「いとこまやかにおぼえ給ふものかな。君が庭も、その山によりてつくり給ひしや。松のあるなかにまきの見えたるが、姿はいかにありしや。」などたづぬれば、「わが庭にもまきのありしや。つね見はべればわすれたり。」といひし。

(松平定信『花月草紙』より)

※いくもと…数本 ※まき…ヒノキ・スギなどの総称

※青つづら…山野に生えるつる草

【解答】

昔見た峰の木の様子を細かく覚えているのに、自分の庭にある木を忘れていた点。(三十七字)

【大意】

よく物事を記憶して忘れない人が、「昔、(私は) どこそこの山に登ったが、このような峰に松が数本あって、このように枝が垂れ下がっている(松の)中にもう一本(だけ)は高くそびえ立っていた。その(松の)そばに、大きなまきが、横向きに伸びて(生えており、)青つづらが(そのまきに)巻きついていた様子(を今でも覚えている)。」などと話したところ、(その話を聞いた人が)「たいへんこまごまと覚えていなさることよ。あなたの(家の)庭も、その山に似せてお作りになったのですか。(あなたの家の庭に何本か生えている)松の中にまきが(生えているのが)見えました(その松やまきの)姿はどんな様子でしたか。」などと尋ねたところ、(記憶力のすぐれた、その人は)「私の(家の)庭にもまきがありましたね。いつも見慣れておりますので、(私は)忘れませんでした。」と言った。

古文 主題記述の必勝ポイント



- ① 記述問題はまず「**答えの終わりの部分**」から考える。
- ② 古文の主題は「**文章の最後の部分**」を答えの中心にする。
- ③ 字数を補う際に「**対比**」されている内容に着目する。